みなみたま

会 報「みなみたま」第11号

発　　行　南多摩同窓会あかね会
発 行 者　小林　幹彦
〒192-8562　東京都八王子市明神町 4-20-1
東京都立南多摩中等教育学校内
URL：www.akanekai.org/
Email：mail@akanekai.org

歴代の制服：南多摩中等教育学校 10 周年を記念して、現在（左）と南多摩高校時代（右）の制服を着た人形を製作しました。明治時代からの制服の人形とともに、校長室前のガラスケース内に飾られています。

同窓生と学校はウィンウィンの関係

南多摩同窓会あかね会 会長　小林　幹彦

昨年は母校の創立110周年、そして中等教育学校となって10周年の記念行事が盛大に行われました。祝賀会は同窓会の皆さまをはじめ学校、PTA、PTA OB会の皆さまの協力で絆を深め合う素晴らしい会となりました。

また、記念募金では多くの方のご賛同をいただきました。おかげさまで、別稿でご報告させていただくとおり、現役の生徒諸君への支援を実現することができました。心より感謝申し上げます。

一方、中等教育学校へと学校の仕組みが変わったことで、母校を失ったのではないかと残念な思いをもたれた方が多数いることもわかりました。しかし、いうまでもなく現在の南多摩中等教育学校は私たちの母校です。横川楳子先生の教育実践にある貧しい時代も動乱の時代も教育を大切に、広く実学を修め教養を深めようとする不屈の精神は、府立第四高女、南多摩高校、そして南多摩中等教育学校へと引き継がれ、現在も現役生徒の中に脈々と流れているのです。このような伝統あってこその南多摩中等教育学校なのです。現役生徒諸君は同窓生の皆様を先輩として尊敬し、感謝の気持ちを糧に日々様々な活動に頑張っています。どうか同窓生としての誇りをもち、現役諸君の活躍を共に喜び、さらなるご支援、ご声援をいただけたらと思います。

今も母校、南多摩中等教育学校の活躍は素晴らしく、個性豊かでエネルギッシュな若者が続々と育っている様子を見ると、私たちも力をもらうことができます。誇りを持つことができます。誇りを持つことは私たち自身の自己有用感を高め、幸福感につながります。同窓生の支援で現役生徒が頑張り、その様子に同窓生が励まされる。まさにウィンウィンの関係です。この関係が長く続くことを楽しみにしています。

日本の教育を牽引する南多摩の実践

南多摩中等教育学校長　永森 比人美

今年度は、本校の周年式典に多大なる御支援・御協力を賜り心より感謝申し上げます。式典後の祝賀会には、あかね会からも多くの方が参加され本校の教職員と喜びの時間を共有できたことは、教職員にとっても貴重な体験になりました。

さて、本校は、東京都教育委員会から指定された指定校事業（①理数リーディング校、②英語教育推進校、③知的探究イノベーター推進校、④BYOD研究指定校）を活用して学力の向上を図り、「探究学習」を柱において様々な教育活動を行っております。

また、今年度、文部科学省から、WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校として全国の10拠点の一つに指定され、イノベーティブなグローバル人材を育成するため国内外の大学、グローバル企業、国際機関等と連携し、生徒により高度な学びを提供する取組も始めております。

これらの取組を通して、今年度も様々な場面で生徒が日本語や英語で発表したり、企業等への提案を行ったりして、生徒が視野を広げ、多面的・多角的な思考ができる人材へと育っている様子が伺え、大変うれしく思います。

また、給食のストローの使用廃止の試行（日本教育新聞及び日本経済新聞）、南多摩のフィールドワークを基盤とする教育活動「伸びる南多摩」（週刊東洋経済）など、マスメディアにも大きく取り上げられました。

教職員も最先端の取組に関われることに喜びを感じつつ、生徒の夢の実現に向けて、日々、研鑽を積もうとする姿勢が見られ、校長としては南多摩の教育に尽力している教職員の今後にも大いなる期待を寄せているところです。

次の10年を見据えてあらゆる資源を活用し、日本の教育を牽引する南多摩の実践に磨きをかけていく所存です。今後とも変わらぬ御支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

「探究学習」の最先端を突き進む南多摩中等教育学校

南多摩中等教育学校副校長　渡邉 善正

あかね会の皆さま、日頃より様々な教育活動を展開している本校の取り組みについて御理解・御協力をいただきありがとうございます。

今年度、特筆すべき教育活動の一部を抜粋して紹介いたします。

1　WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業

今年度は、文部科学省からWWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校10校の一つに指定され、イノベーティブなグローバル人材を育成するために、様々な取組を行ってきました。

（１）文理融合のカリキュラム開発

来年度から、次の新科目を実施します。

① 地球探究（4年生2単位）

社会科では「地理」、理科では「地学」の内容を中心に、社会科の教員が授業を行い、自然環境と人類の関わり方について学習します。

② MIE（mathematics in English）（5年生1単位）

数学科の教員とJETとのTTで英語を用いて数学の問題を解く授業を行います。

③ Pensees（6年生１単位）

正解のない課題に対して、他者との議論の中で答えを導くという課題解決学習を中心に、哲学の授業を行います。

④ 総合的な探究の時間（Cross the Border）（4年生2単位 ）

今までは、4年生から6年生まで1単位ずつ行っていましたが、探究の質を向上させるため4年生課題設定（2時間）に改めます。

（２）11月17日（日）Diverse Link Tokyo Edu

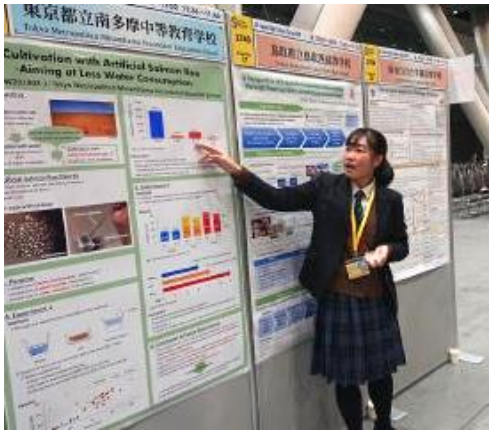
特別講座 「Tokyo Leading Academy」への参加

文部科学省WWLコンソーシアム構築支援事業の管理機関である東京都教育委員会が開催した「Tokyo Leading Academy」の紹介をします。東京大学先端科学技術研究センターにおいて特別講座が開催され、第1部は、再生可能エネルギーに関する講演が行われ、第2部は、本校の5年生の生徒による水素についての研究発表でした。発表直前に特別ゲストとして小池百合

子都知事が出席され、知事の前で英語でプレゼンテーションできる機会を得て、とても光栄なことでした。生徒は堂々と発表し、発表後の質問にも流ちょうな英語で答え、周囲から称賛されました。写真は質問に答えている生徒の様子です。

（３）12月22日（日）全国高校生フォーラムへの参加

東京国際フォーラム（千代田区丸の内）で参加校128校の高校生が、英語でのポスター発表によりグローバルな社会課題の解決や提案等を発信しました。本校からは、5年生の生徒が“Cultivation with Artificial Salmon Roe -Aiming at less water consumption- ”（「人工いくらを用いた植物栽培 ～水の消費量を少なくするために～」）というテーマで発表しました。発表後の審査員からの質問にも流暢な英語で回答し、他県の先生や文部科学省の審査員から称賛の声が上がりました。写真は、ポスター発表している生徒の様子です。



２　部活動の報告

次に今年度、全国大会に出場レベルの活躍をした3つの部活動を紹介いたします。

（１）8月1日（木）太鼓部（後期）全国大会で最優秀賞

7月30日（火）から8月1日（木）まで武雄市文化会館（佐賀県）で、2019さが総文（全国高等学校総合文化祭）郷土芸能部門が行われ全国から本校の太鼓部（後期）を含めた58校が参加し、審査の結果本校が最優秀賞（第1位）である「文部科学大臣賞」を受賞しました。

この結果を受けて、8月24日（土）に国立劇場 大劇場で「全国高等学校総合文化祭 優秀校東京公演」にも出場しました。

国立劇場での演奏

（２）11月23日（土）南多摩フィル 全国大会に出場

千葉県文化会館大ホールにて「第8回日本学校合奏コンクール2019　全国大会グランドコンテスト」が開催されました。

南多摩フィルハーモニー部は、5年連続の出場となり、今年度はドヴォルザーク作曲「交響曲第3番より第3楽章」を演奏し、銀賞をいただくことができました。３年ぶりに銀賞に返り咲き、喜びもひとしおでした。

本番前のリハーサル

全国大会という舞台で緊張しながらも、心を込めて、楽しんで演奏できたことや、お客様からたくさんの拍手をいただけたことを誇りに思っています。

（３）令和元年11月23日（土）なぎなた部　全国選抜大会東京都予選会「初の三冠」団体試合、個人試合、演技で優勝

東京武道館に於いて、第30回東京都高等学校なぎなた秋季大会兼第15回全国高等学校なぎなた選抜大会東京都予選会が開催されました。

団体試合は、準決勝で都立富士高校に僅差で競り勝ち、決勝では都立城東高校に全勝と完全勝ち。令和2年3月20～22日に兵庫県伊丹市で開催される全国選抜大会の出場権を得ることが出来ました。コロナウイルス感染症拡大防止のために残念ながら全国大会は中止になりましたが、個人試合では、5D鈴木柚香選手が優勝、3位に4B武田夏葉選手が入り、個人でも全国選抜大会出場権を獲得したことは大きな自信につながりました。

演技では、5D鈴木柚香･4C樋口芙有子組が優勝。二位に4B武田夏葉･5B関茉衣子組が入賞しましたが、残念ながら全国選抜大会には演技競技がありません。しかし、この調子で練習を重ね、来年度の関東大会、インターハイでの優勝を狙います。

鈴木選手の試合の様子

閉会式後参加者での集合写真

あかね会の皆様から太鼓部へは「祭礼用附締太鼓及び締太鼓立奏台」南フィルへは「ファゴット、コントラバス、ホルン」なぎなた部へは「校章入り薙刀胴」などの高価な記念品を周年式典でいただき深く感謝申し上げます。

本校はこれからも文武両道をめざし、生徒の夢の実現に向かって、教職員が一丸となって教育活動を展開してまいります。あかね会の皆様におかれましては、今後も本校に対する御支援・御協力をいただきたく存じます。教職員一同、今後もあかね会の益々の御発展をお祈りしております。

南多摩中等教育学校卒業生の進路

南多摩中等教育学校 進路指導部主任　徳武 英人

今年卒業の5期生は、過去最も国公立志望者が多く、国公立大現役合格数は68名と過去最高の合格者数を出し、現役国公立合格率は都立校としては異例の49.6%となりました。東京大学、一橋大学、東京工業大学、京都大学の難関4大学に国公立大医学を加えた合格者も13名と過去もっとも多くなりました。特に京都大学には初めての合格者を出すことができました。上記4大学に旧帝国大学を加えた難関10と呼ばれる大学にも19名の合格者を出しました。その他、東京外国語大学7名、東京学芸大学5名など複数の合格者を出す大学が増えました。

東京都立大学理学部生命科学科には大学での実験や演習への参加、研究内容のプレゼンテーションによって選考するゼミナール入試に2名の合格者を出しました。

北海道大学、お茶の水女子大、東京学芸大学にはLWP（ライフ・ワーク・プロジェクト）での研究を活かし、AO入試や公募制推薦入試で合格しました。

このように本校の教育活動全体が大学進学にも活かされていました。

過年度の4期生も一橋大学、東京工業大学など難関大学に志望を貫き通して合格を勝ち取りました。

1．国公立大学及び国公立医学部・私立大医学部

国公立大学	5期生	過年度	計
帯広畜産大学	1		1
北海道大学	2		2
東北大学	2		2
茨城大学	1		1
千葉大学	1	1	2
お茶の水女子大学	2		2
電気通信大学	3		3
東京大学	3		3
東京外国語大学	7	1	8
東京学芸大学	5		5
東京工業大学	4	1	5
東京農工大学	3		3
一橋大学	3	1	4
横浜国立大学	3	2	5
新潟大学	1		1
山梨大学	3		3
信州大学	1		1
名古屋大学	2		2
京都大学	2		2
神戸大学	1		1
奈良女子大学	1		1
国際教養大学	1		1
埼玉県立大学	1		1
東京都立大学	9	1	10
神奈川県立保健福祉大学	1		1
都留文科大学	1		1
横浜市立大学	2	1	3
名古屋市立大学	1		1
国立看護大学校	1		1
計	68	8	76

注）5 期生（現役のみ　卒業生 137 名）
4 期生（過年度卒業生）
合格者数：複数大学の合格者は重複計上

上記のうち医学部医学科	5期生
信州大学	1
計	1

私立大学医学部医学科	5期生
杏林大学	1
順天堂大学	1
東京歯科大学	1
計	3

2．私立大学（現役のみ）

私立大学	5期生	
早稲田大学	25	
慶應義塾大学	11	
上智大学	8	
東京理科大学	23	67
明治大学	48	
青山学院大学	18	
立教大学	20	
中央大学	26	
法政大学	34	146
成城大学	3	
成蹊大学	8	
國學院大学	7	
明治学院大学	6	
武蔵大学	2	26
芝浦工業大学	6	
日本大学	22	
東洋大学	6	
駒澤大学	7	
専修大学	2	43
津田塾大学	3	
東京女子大学	2	

私立大学	5期生	
日本女子大学	10	15
北里大学	7	
杏林大学	5	
順天堂大学	1	
昭和薬科大学	2	
東京薬科大学	6	
星薬科大学	1	
明治薬科大学	1	
東京農業大学	11	
麻布大学獣医学部	1	
日本獣医生命科学大学獣医学部	1	
工学院大学	10	
東京都市大学	6	
東京工科大学	2	
東京電機大学	4	
東海大学	6	
武蔵野大学	3	
神奈川大学	1	
多摩美術大学	1	
武蔵野美術大学	1	
南山大学	1	
同志社大学	1	
近畿大学	1	

3．短大専門学校

短大、専門学校	5期生
大妻女子短期大学	1
都立南多摩看護専門学校	1
東京電子専門学校	1
計	3

（2020年3月31日時点）

【歴史発見１】

野矢トキ先生の音楽の授業②
―卒業生のノートを手がかりに―

実践女子大学生活文化学科助教　越山 沙千子

第四高女の音楽教師であった野矢トキ先生（1890-1945）が授業で取り上げた歌は、卒業生が授業で必死に書いたノートから知ることができます。本稿では2019年度の研究成果のうち、野矢先生の長女で、第四の卒業生でもある村和子さん（1918-2016）のノートを手がかりに、①記載された歌の出処、②原曲、元歌についてご報告させていただきます。

村和子さんのノートは2冊あり、様々な書き込みから1冊目は1～3年生の頃、2冊目は４～5年生の頃に使われていたと考えられます。2冊には計56曲の歌が書かれていました。また、謄写版印刷されたプリント1曲を含め、57曲を対象としました。

①歌の出処

野矢先生が何を見て歌を選んでいたか？はご本人の記録がありませんので、歌が初めて掲載された出版物を探すことにしました。

現在はインターネットで著作権フリーとなった古い資料を見ることができます。「国会図書館デジタルコレクション」や「国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ」、「広島大学図書館教科書コレクション」が役に立ちました。また、「国立音楽大学附属図書館童謡・唱歌検索」は、冒頭の歌詞やメロディーから誰のどの曲というのが分かるので、大変参考になります。しかし、図書館に所蔵していない資料も多く、古書店で手に入れたものもありました。

調査の結果、明治期の初版の出版物に載っていたのは21曲、大正期は8曲、昭和期は20曲、不明7曲になりました。明治期には、『小学唱歌集』や『中等唱歌集』、『女学唱歌』、野矢先生の前任である近藤千穂子先生の夫、近藤朔風が編纂した『女声唱歌』もありました。合唱曲を集めた『重音唱歌集』には、第1回卒業式から歌われている《感謝》と《送別の歌》が収録されています。大正期には《夜の調べ》や《眞白き富士の嶺》のピース楽譜があります。教師向けの教材集も見られました。昭和期には当時発行されていた複数の高等女学校向けの教科書があります。ノートに書かれた「オリムピック応援歌」は、昭和7（1932）年のロサンゼルスオリンピックのために作られた《走れ！大地を！》であることが分かりました。レコードの売り上げが良く、次のベルリンオリンピックの際にも歌われていたようです。水泳強豪校であった第四高女らしい選曲です。

②原曲、元歌

ノートに書かれた歌は、日本の作曲家によるものが18曲で、32曲が欧米の作曲家のものでした（不明6曲）。欧米曲の内訳は、ドイツ、イタリア（7）、イギリス、アメリカ（4）、オーストリア、フランス（3）、スコットランド、ベルギー、ロシア、チェコ（1）です。19世紀ロマン派の主要なジャンルが網羅されている他に、民謡、賛美歌が見られます。具体的には以下のものがあります。（カッコ内はノートに書かれたタイトル）

・ドイツ、オーストリア

ウェーバー：《魔弾の射手》〈序曲〉（わかれの鳥）
シューベルト：《菩提樹》（歳暮の歌）
メンデルスゾーン：《ヴェネツィアの舟歌》（ヴェニスの船唄）
ヴェルナー：《野ばら》（野中のばら）

・イタリア

ヴェルディ：《椿姫》〈ああ、そは彼の〉（嵯峨の里）
トスティ：《セレナータ》（宵の歌）
マリオ：《遥かなるサンタルチア》（同左）

・フランス

マスネ：《エレジー》（悲歌）
サン＝サーンス：《サムソンとデリラ》〈あなたの声に私の心は開く〉（心花咲く）

・アメリカ

フォスター：《オールド・ブラック・ジョー》（櫻散る）

多くの素敵な作品を歌っていたことが分かります。

貴重な資料を提供いただいた村和子さんのご家族、あかね会の皆様に厚く御礼申し上げます。今後も情報をお寄せいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（連絡先：南多摩同窓会あかね会事務局　または、
越山E-mail: koshiyama@akanekai.org）

（本研究は、所属先の「2019年度特定研究奨励金」の助成を受けています。）

インタビュー　「日本画家　宮下真理子さん」

日本画の魅力　－1300 年変わらぬ技法－

平成 31 年卒（中等 4 期生）　越智　伊央

現在、日本画家として活躍している、南多摩高校卒業生の宮下真理子さん（平成6年卒）にお話を伺ってきました。

今回は、日本画という美術と毎日向き合っている宮下さんに、美術や日本画の魅力などについてインタビューしてきました。

インタビュー中の宮下真理子さん（右）

＊美術の魅力とは？

生きていくうちに、とてもショックな出来事や、落ち込むことはたくさんあると思います。そんなときは、布団をかぶって泣いていても構いませんが、それでも、翌日にはそこから出ましょう。そして翌日出たときに、線路に飛び込むのではなく、屋上に行くのでもなく、まず、美術館に行くことをお勧めしています。

そのときに気づけるものはその時々によって違いますが、美術作品と対話することで何か学びがあったり、何か語り掛けてきたりするからです。そして何より、美術作品と対話している間は、すごく落ち込んだことから解放され、美術作品が様々な世界への心の旅に連れだしてくれます。

このように美しいものに心が触れる体験で、人の心に化学変化を与えることが美術の魅力ではないでしょうか。

日々様々な問題があり、生きていく上で思い悩むことや苦しい出来事が多々あるので、自殺するなど、様々なことを諦めてしまう人が世の中に多くいると思います。しかし、生まれ育ったこの日本には、魅力的で素晴らしい国の歴史や文化があります。その文化を是非生かして、古くから受け継がれた美しいものを見ることで心の洗濯をして諦めずに、また新しい自分を見つけてもらいたいなと思っています。

＊日本画の魅力とは？

日本画の魅力は絵具の美しさですね。

そもそも絵具には、どこの世界でも変わらない『絵具＝色の粉＋接着剤』という式があります。そして、この接着剤と色の粉の違いが、絵具の違いになります。

例えば、水彩画の絵具にはアラビアゴムを接着剤に使い、アクリル絵具にはアクリル樹皮を使います。そして、日本画の絵具には、接着剤に動物の皮や骨髄を煮込んだ、膠（にかわ）を使います。

日本画の色の粉は天然の岩石、いわゆる宝石を砕いた「岩絵具」というものを使います。なので、皆さんが美術の授業で扱う絵具のように、色を混ぜて新たな色を作ることはなく、色が変わると石自体が変わります。つまり、「この石の色はこれ」と石によってそれぞれの色が決まっています。そして、石を細かく砕くと色が浅くなり、荒く砕くと色が濃くなるので、一つの石の種類で十三種類ほどの番手を変えて使い分けます。

これが1300年前から続く日本画という技法なので、未だに源氏物語絵巻や高松塚古墳の壁画と同じ材料を使って描いていることになります。

そもそも、石の粉から絵を描いていたというのは古い歴史からあったのですが、だんだんこの天然石を採ることが難しくなり高価になったので、合成して作られたチューブ入りの絵具を使うようになりました。

そんな昔からの絵画の歴史を受け継ぎ、天然に産出される色の美しさを生かした絵画である日本画。さらに日本の精神性ということも加味されることで出来上がる奥深い世界観もまた、魅力となっていると思います。

＊宮下さんの絵の魅力に迫る“青”“海外”

宮下さんの絵を拝見させていただいて、青色や海外を題材に使われていることが多いように感じました。そこで、「青」という色と「海外」についてもお話を伺ってきました。

『青』という色は、海と空など、世界で一番面積を占めている色であり、それは物質の色ではなく、現象の色です。

例えば、昼間は青い海でも、夕方には青くなくなる。また、青いイメージの空も、ピンクになったり、白くな

ったり、黒いときもあります。そんな現象として目に映る色でしかない青は、とてもミステリアスで魅力的で、とても好きです。

それに加え、日本画の青の絵具は群青（ぐんじょう）という色になります。群青は藍銅鉱（らんどうこう）、別名アズライトという鉱物でとても美しく、古来より日本画の絵具として著名な作品に扱われてきました。なので、日本画を描く際には「青」をよく使います。

現象の色なので、物の色、着色したような「青」というものは世の中にそんなにないのです。ですが、その中の「青」という色の展開で、いろいろなもののモチーフの中に合う色を見出して、作品にしようと思っています。

作品の前で　宮下真理子さん（左）と越智（右）

海外には取材で年に二回ほど行きます。それは、自身の芸術性を高める一つのアプローチ方法としてでもあり、どのような場所の風景でもモチーフでも、日本画の魅力的な画材で表現することで新しい芸術的な視点が産まれるのではないかと思っているからです。

そのときには旅行者として行くのではなく、その国で生活をする形で行くので、ホテルに泊まるのではなく、アパートを借ります。

現地では、その国でしかできない体験をするために現地の見たこともない野菜を買ったりもします。英語が通じない国でその野菜の調理法を聞いたりすると、面白いことにお店の人が「だれか英語わかる人いない？」と周りの人に声をかけてくれます。そうすると、おばちゃん達がわらわらと寄って来て、「これはこうやって食べるのよ」「ああやって食べるのよ」と教えてくれるんです。そして、その野菜や文化が違うところで作られたお肉の加工品を料理して、日本人の口に合わないなとか、おいしいなとか思いながら食べます。食べてみないとわからない。でも、レストランなどでお金を払って食べるのでは意味がない。そういう生活の中で、スケッチをしたり、いろいろなものを見たりしています。

そして、その中で絵を描く題材を決めるときには、題材を探そうとしないことにしていますね。

何も考えないで歩いていて、ふと何かに気が付くことがあります。それを題材にするのですが、なかなか降りてこないので、見つからなくてずっと彷徨っていたりします。「こういうものが描きたい」「こういう構図が良いから」と条件から題材を探しに行くことはないですね。なので、手で描いているようで足で描いているような気がします。

＊最後に------日本画の変遷とこれから

1300年前から技法が変わらない日本画ですが、日本画がおかれている環境は変化してきています。

昔は襖絵や屏風絵、掛軸といった生活の一部に、当たり前のように手書きの絵画が日本画として身の回りにたくさん存在しました。しかし、現在では和室が減り、床の間のない住居が多くなったため、日本画は以前より身近なものではなくなってしまいました。日本画はいまや美術館のガラスケースの中にあるものと感じるかもしれません。

しかし、そんな現代のライフスタイルに合わせた様式に変化しつつある日本画の姿もまた、その歴史の流れに沿って存在しているものだと言えます。歴史的な名作・名画も日本画ですし、その古典技法から昇華させた現代の日本画もまた、一つのスタイルとして確立しています。実は日本史の授業で使ったり、暇でパラパラめくったりしていたあの資料集に載っている多くの絵は、当時は写真がなかったため日本画です。「源頼朝ってこんな顔なのか」と思った絵も、あの落書きしたペリーの顔の絵もそうなんですよ。

そんな現代の日本画の世界で、作家活動をこれからも続けていくつもりです。

宮下真理子さんの作品（浴衣の図案）

「南多摩」の思い出

第四高女から南多摩高校へ！
―生涯の基盤となった６年間―

昭和 27 年卒　廣瀬 智子

昭和21年4月、私は東京都立第四高等女学校の一年生になりました。焼け跡のコンクリートの土台が残っている広い校地には、板張りの体育館のような大きな建物があり、それは入学式場でもあり、明日からの教室でもありました。松竹梅菊桐桜の6学級が衝立で仕切られ、学習が始まりました。隣も前後の組も見えましたが余り気にならず、皆仲良しになりました。休み時間は、ドッジボールを大勢でしたり、ガラスや釘などを拾って山にしたりしていました。学校行事等があると衝立が片づけられ、全校生徒が分散授業の場から集まってきました。姉は四年生でしたので一緒になりとてもとても楽しかったことを思い出します。学校にも慣れ、落ち着いていきました。

何しろその数カ月前は、同じ学区にある小学校の六年生で戦争中でした。警戒警報のサイレンが鳴ると、勉強を直ちに中止し、地区の班編成で下級生を連れて下校するということが何度も何度もあったのです。そして8月1日の夜半から2日未明、八王子は大空襲にあい、旧市内は殆ど焼失しました。私の家も第四高女もまる焼けでした。小学校は一部残りました。8月15日終戦となり、二学期が始まりました。

いよいよ入学試験を考えなくてはならなくなりました。どうしても第四高女に合格したかったのです。祖父が創立に関わり、母が昭和3年本科の卒業生、姉が在校生でした。不合格なら社会人です。当時の義務教育は、小学校6年でした。一部焼け残った校舎は電気も付かず、窓ガラスが割れた状態でしたが、苦にならず皆頑張って勉強しました。

昭和21年10月学校のプール脇で姉と

昭和22年二年生、4月1日から六三制発足となり、私達が最後の女学校入学となりました。校舎ができ上級生達も戻ってきました。横川楳子先生の胸像、池、築山も整備され静かな雰囲気が出来上がっていきました。

夜間高等女学校が併設されました。

学校では、次々に楽しい行事を用意してくれました。映画教室、前進座の公演、近衛交響楽団、藤原歌劇団、長門美保さん、大谷冽子さんの蝶々夫人の歌等。すばらしいものばかりでした。染井能楽堂での能、狂言鑑賞、歌舞伎座での歌舞伎鑑賞、奈落の見学では、全校生徒が桜井勝美先生達の事前説明を受けていました。

体育も盛んで、特に水泳は全校皆泳だけではなく全国的な有名校でした。古橋広之進さん橋爪さん達も来てくれていました。三多摩合同の運動会が立川二中で実施され、中央線沿線の中学校が集まりました。

バレーボール部は盛んで、東京大会に出場する上級生を応援に行きました。母も在校中に川越等の女学校にバレーボールやテニスの試合に行ったと話していました。私は稲田秦先生の音楽の授業に驚きました。楽譜が渡されピアノの音で自分のパートを決めて歌うという方法で初めのうちはついて行かれませんでしたが、徐々に合唱の楽しさを知りました。合唱コンクールが始まりました。私はこの楽しさが忘れられず勤務校で児童も保護者も地域の方も一つになって体育館一杯に大合唱をしました。

三年生になっては、文部省、CIEの家庭科教育モデル校実験校として、全国各地、アメリカの先生方も見学に来ました。仙波千代先生や家庭科の先生方が大活躍で映画も作られ、私達も参加しました。

初の宿泊旅行が行われ、伊豆長岡方面で修善寺、韮山反射炉にお米持参で行きました。そして3月、第四新制女子高校併設中学校の生活は終了しました。充実した日々でした。

昭和24年4月、都立第四新制高校の一年生になりました。350名7組編成で、内男子8名でした。初めての男女共学です。都立南多摩高等学校と改称されました。校章も変わりました。これらは、生徒会でも話しあわれました。この頃から生徒会活動も盛んになりました。音楽研究部では、NHKの高校生の時間というラジオ番組に招かれ、稲田先生の指揮で3曲合唱しました。

昭和27年3月8日、南多摩高校を卒業しました。この3年間、校名変更、男女共学、校舎校庭の整備等々、人生の中の大きな3年間、6年間でした。

音楽研究部　NHK 放送の際日比谷公園で

南多摩高等学校の6年間の校長先生は、岩崎源兵衛先生でした。厳格な中にも優しい方でした。鉛玉鎖骨、という言葉が強く心に残っています。現在私が所属している八王子退職校長会で支部便りを創刊号から調べなおしている時、岩崎先生のお名前を目にし、ハッとしました。発現主義教育、体験している間に知能徳性が発現する。生徒には豊富な可能性が潜在しているので発現させてやりたい等、教育愛、生徒愛が97歳で亡くなるまで寄稿を続けて述べられていました。

戦後の混沌とした時代の南多摩の6年間は、学業面はもとより、文化面情操面体育面等々の習得、同窓生との交流で新しい視野が広がったり、新しい分野に道がつながったりと生涯の基盤を作る大事な年月だったと思います。何歳になっても南多摩高校時代は深く心に残っています。

「南多摩」の思い出

つながり

令和2年卒（中等5期生）　谷口　大地

卒業に際してこのような文章を書くのは小学生の時以来です。どのようなことを書いていたのか、見返してみると、僕の卒業文集の結びには『小学校はサイコーに楽しかったです』とありました。「最高（いちばん）」という言葉を人生の12年目にして使ってしまう稚拙さに恥ずかしさを感じるとともに、仲の良かった友達とのキラキラした日々が思い出されました。

南多摩に入学してから数週間は「最高」だった小学校に戻りたいという気持ちがありました。やはり、まるっきり新しい環境で、初対面の同級生や先生になかなか馴染めないむずむずとした感覚があったからです。『小学校では下の名前で呼び合っていたのに中学校は苗字で呼び合うのか！』と、当時はそれが強烈にショックでした。

そんなむずむずした感覚を打破するきっかけとなったのが部活動です。部活動ではとにかく人と人とのつながりを体感しました。

僕が青春をかけた太鼓部では、練習をする中で演奏の反省をする時間があります。『このフレーズでこの人が遅れている』など、気づいたことを言い合う時間です。当初僕たちは頑張った仲間の演奏にケチをつけるのはかわいそう、といったふうに変に気をつかい合っていました。すると顧問の今川先生がハッキリと言いました。『そんなのは真の仲間じゃない』お互いのことを真に思いやるのなら思ったことをしっかり伝えるべきだという教えです。

今の僕たちにはすっかり当たり前の考え方となりましたが、当時の僕たちにとっては衝撃的な言葉でした。

この考えは同期の中だけのものではもちろんありません。先輩後輩の縦のつながりの中でも当たり前のこととして存在します。そのおかげで同期の人とだけでなく、太鼓部全体として仲間になれました。全国大会で最優秀賞をとることができたのも、人と人との心からのつながりによるものだと思います。

部活で感じた人とのつながりは部内に収まりません。練習中の騒音を我慢してくださった方々、インターロッキングのランニングを譲り合ってくれた外部活の人たち、太鼓部を応援してくださった友達や先生方とのつながりもあります。本当にありがとうございました。

そして、様々な形でご支援いただき、僕たちの成績を自分たちのことのように喜んでくださったあかね会の方々にこの場をお借りして感謝の意を表させていただきます。

部活を通して人とのつながりを意識することができるようになると、普段の生活も、イベントも、学校生活すべてで同じことなのだとわかりました。僕が感じ取ることのできるつながりの輪はこの6年間でとても大きくなりました。これから先、もっともっと大きくしていきたいです。

5期生は、担任の先生方も含めて、全員が信頼し合ったうえでぶつかり合い、認め合い、応援し合える強いつながりを持った集団だと思います。

僕が南多摩の5期生として過ごした6年間はサイコーに楽しかったです。

「南多摩」の思い出

充実した6年間

令和2年卒（中等5期生）　関口　史果

私は、南多摩中等教育学校での 6 年間で、勉強、部活など様々な場面でたくさんのことを学びました。

勉強面では、常に努力しなければ周りに置いていかれてしまうという緊張感がありました。進度が早く、新しいことがどんどん増えてくるという学校生活は確かに大変でしたが、毎日が飽きることのない刺激で溢れていて、とても楽しかったです。また、部活との両立に悩まされることも度々ありました。しかし、その中で自分の勉強の仕方や生活リズムを見つけ、自分自身の管理をすることの大切さを知りました。

部活では、薙刀部に所属していました。私が入部した頃はとても部員数が少なく、まだ薙刀同好会としての活動でした。そのときのことを思い出すと、部活へと昇格するまでの先輩達の努力やどんどん増えていく部員で少し狭く感じた活動場所の柔道場にとても胸が熱くなる思いです。薙刀部での活動は、私の南多摩生活を構成する主要部分と言っても過言ではありません。毎日のように裸足で板の上を擦るように動く中で、その摩擦で足の裏の皮が剥けて、歩くことが痛かったこともありました。防具を着けての試合では、痣が身体のあちこちにできたり、足の指の爪が割れたり、剥がれたりしたこともありました。そのような辛かったり苦しかったりした経験も、ずっと一緒に頑張ってきた仲間と共有できたからこそ乗り越えることができたのだなと思います。

そのときに感じた、仲間の大切さや鍛えられた精神力はこれからの生活の糧になると思います。もちろん、辛いことばかりではなく、楽しいこともたくさんありました。先輩、後輩分け隔てなく仲が良い薙刀部では、常に笑いが絶えず本当に居心地の良い空間でした。また、このような辛かったり楽しかったりした練習の成果として大会で入賞できたり、一緒に頑張ってきた仲間の活躍を見ることができたことも私は薙刀部で、このメンバーで活動できて、良かったなと心から思います。

さらに、顧問の徳地先生の言葉でもあり、部の目標でもある、「凛とした人になる」という、この目標は、この 6 年間で最も大切にしてきました。薙刀という武道を通して何よりも学んだことは礼儀、挨拶です。自分から挨拶すること、周りをみて自分から行動すること、気を配ること、当たり前の事ですが、それを当たり前のようにやることがなかなか難しいのです。しかし、これらを意識せずに当たり前にすることが「凛とした人」になる第一歩だと学びました。そして、これからも徳地先生の言葉をはじめ、薙刀部で学んだことを活かして「凛とした人」になれるように頑張っていきたいと思います。

そして、部活動をはじめ学校生活の様々な場面において、支援してくださったあかね会に感謝しています。薙刀部では、団体戦で使用する胴をいただきました。それを着けて試合に出ることを目標に、より一層、練習に真剣に取り組むことができました。本当にありがとうございました。このような、自分のやりたいことに精一杯取り組むことのできる環境で生活できたこの 6 年間はとても充実していて、幸せでした。この素敵な南多摩がずっと続き、ますます進化することを願っています。

この南多摩での生活で学んだたくさんのことを信じて、これからの大学生活、そしてその先も進んでいきたいと思います。

昭和 42 年 11 月 24 日発行　「南高新聞」第 60 号より

南高祭、中間試験も終わった。秋も深まって、やがて訪れる冬に備えて、甲州街道沿いのイチョウ並木も、夕陽に照らされたその金色の扇を一ひら二ひら舞い落とさんとしている今日この頃。十年ほども前には、さぞ味わい深い風景であったことだろうに。

しかし現在、時代の流れと共に甲州街道は、風物詩の舞台から交交通戦争の戦場へと一変した。

今や、交通事故によって、全国で年間、一万数千の尊い命が奪われ、なんと五十万余りにのぼる人々が、負傷している。われわれ南高生としても、当然、交通問題には、無関心でいられなくなる。

その南高生が、いったいどうしたことであろうか。横断歩道の渡り方が遅いなどという苦情が続出されようとは。その原因は？

交通事故の恐しさを知らぬわけでもあるまい。かと言って、とりわけ南高生の足が、短いというわけでもないらしい。とすると、やはり南高生のほとんどが、〝自分だけは大丈夫〟という安易な考えを持っていることが、原因ではないだろうか。しかし、〝自分だけは……〟これを三回、唱えさえすれば、交通事故に会わないで済むというのであったら、誰が交通戦争の悲惨さに、涙したであろうか

こんなおりもおり、十月末の交通安全週間に、南高正面の甲州街道に歩道橋が、掛けられた。南高生のために、わざわざ掛けられたようなものである。少なくともこれで、南高前の甲州街道での交通戦争からは解放された。けれども安心するのは、まだ早い。道路はここそこに、いくらでもある。まして、運転者の不注意による事故も、後を絶たない現在である。

あなたは、どんな気持ちで、この歩道橋を毎日、渡っているのだろうか。〝自主、自主〟と心に呼びかけながらであろうか。それとも。十年前の感情を取りもどしてイチョウ並木の美しさに、ため息をつきながらであろうか。

歩道橋の名前変更

平成30年6月27日に学校前の甲州街道に架かる歩道橋の名称が、半世紀ぶりに「南多摩高校前」から「南多摩中等教育学校前」に変更された。

左の記事は、タブロイド判「南高新聞」1 ページ目の最下段に掲載されていたコラムで、当時の生徒の通学の様子が読み取れて興味深い。

学校が中等教育学校になっても、この歩道橋と交差点の名称だけは、しばらく「南多摩高校前」が残っていたが、実態に合わせ、変更された。

【歴史発見２】

湧水（わきみず）は街（まち）を巡（めぐ）っていた

昭和 44 年卒　菱山　剛秀

明治41（1908）年に多摩地域初の高等女学校として府立第四高等女学校（第四高女）が開校して110年が過ぎた。第四高女は昭和25（1950）年に男女共学の都立南多摩高等学校となり、平成22（2010）年に設置された中高一貫の都立南多摩中等教育学校も昨年10周年を迎えた。

第四高女開校当時の校舎の写真が左の写真①であり、開校直前の明治39年に刊行された地図が左下の地図②である。右側の写真③と右下の地図④は、いずれも開校から四半世紀ほど過ぎた昭和初期のものである。

現在の八王子市街に湧水はほとんどみられないが、明治39年の地図②を見ると、水車の地図記号（赤○）が目につく。水車を回すのは湧水を集めて流れをつくる小川である。水車の記号を繋ぐように水路があり、水路を上流に遡ると池や湿地に辿り着く。そこは八王子の市街地を載せる扇状地が浅川の流れで浸蝕された扇端部で、扇状地の下を伏流した地下水が湧水となって地表に現れた箇所（青○）である。この地図を見ると、南多摩の校歌にあるように湧水がこの辺りを巡っているのがわかる。

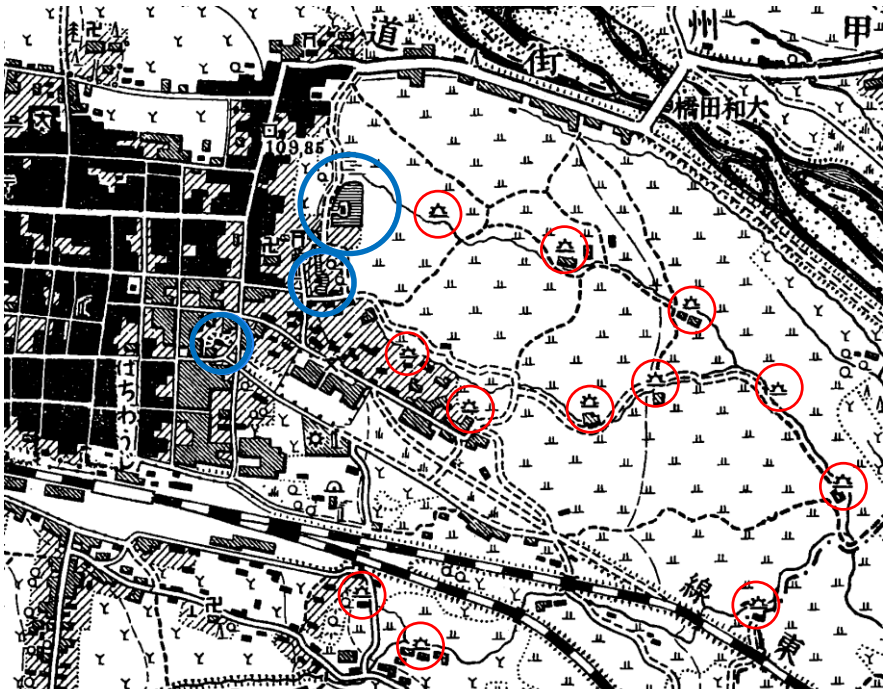
昭和初期の地図④にある「女學校」が前身の「第四高女」である。この地図と同時期の右側の写真③を見ると、校舎はアルファベットのＥを横に倒したような形をしている。学校の敷地の南の通りは明治39年の地図には無いから第四高女の開校に合わせて新たに作られた道路であろう。よくみると、道路と学校の敷地の間に水路が見える。この場所に学校を建設するにあたり、それまでの水路を道路に沿って迂回させ、今も歩道の下を流れている。

大正14年に京王帝都電鉄が八王子まで開通して終点の東八王子駅が第四高女の前にできた。昭和4年にはこの駅の北側から甲州街道を現高尾駅まで武蔵中央電気鉄道の路面電車が開通しており、地図④にも描かれている。

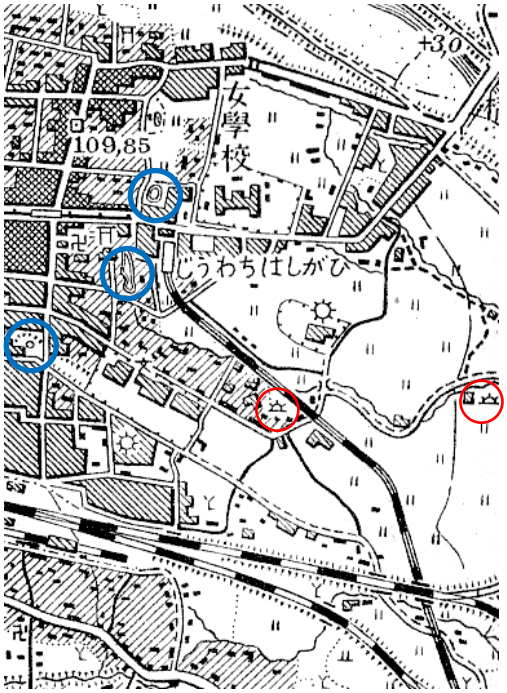
現在、母校の周辺は建物に埋め尽くされているが、昭和初期まではのどかな田園風景が広がっていたようだ。

① 第四高女開校時の校舎

③ 昭和初期の第四高女



② 明治 39 年の地形図（1:20000「八王子」陸地測量部）



④ 昭和 6 年の地形図（1:25000「八王子」

「バッタでバッタリ」の二人

昭和44年卒　井上　務　　昭和45年卒　近藤（井上）富代子

南魂祭で「頑んバッタ」

１年後輩の同窓生と多摩川河川敷でバッタリ。福生市の「環境フェスティバル」会場でした。太陽光だけで目玉焼きが作れるという装置を見学しているとそのすぐ近くにシュロという植物を材料にしてバッタなどを作るブースが…。私もシュロでバッタを作っていましたのでそこにすい寄せられました。とても上品で優雅な女性の皆様と談笑していると同窓の友が複数いらっしゃることが判明。そのお一人が近藤さんでした。「奇遇ですねぇ～」。多くの卒業生を輩出してきた我が母校だからこその出会いだったと南多摩に感謝です。

南魂祭の会場で　近藤（左）さんと井上（右）さん

ある日のこと

それから数年が経ったある日「お子さんたちにシュロバッタを作ってあげるイベントを手伝っていただけますか？」との連絡。「お誘いありがとう！」ということになり、南多摩の同窓生二人は大きなイベントの一角で、元気なお子さんたちとの楽しい時間を過ごすこととなりました。そのころ私は南魂祭「あかね会」の教室の片隅でシュロバッタを作るコーナーを担当していましたので「来年は私と一緒にシュロバッタ作りを！」とお願い。近藤さんは即座に「やらせていただきますとも、先輩にも声を掛けます」とご快諾。2019年9月の南魂祭では二人でお客様をオ・モ・テ・ナ・シ。先輩は都合が合わず残念でした！

未来の宝との出会い

さて、南魂祭で何故バッタ作り？という疑問があるかもしれませんので少し説明いたします。今や、我が母校は憧れの名門校（かつてもそうでしたが今は格段にスゴイ！）。南魂祭はそこを目指す親子連れの〝オープンキャンパス“の場でもあります。シュロでバッタを作るには少しばかりの根気や手先の器用さが要求されます。粘り強く頑張ってバッタを手にしたお子さんたちは達成感を味わい満足気です。完成までの過程では「昆虫の脚は何本？」「バッタとキリギリスの違いは？」「バッタの眼はいくつ？」などと勉強もします。手先が器用だったお子さんがやがて手術が上手な外科医になるかも、素敵な作品を創作する造形作家になるかも、昆虫に興味を抱いたお子さんがやがて立派な生物学者になるかも。そんなことを夢見ながら、やがて同窓の一人になるかもしれない未来の宝（未就学児や保護者の方が夢中になる場合も）を相手にバッタを作っているという訳であります。

「秋が来るまで待って！」とK子先輩が…

私より１年後輩の近藤さん、南多摩時代はテニス部に所属。夏合宿でスイカ割りをしたとき、美味しそうなスイカが食べられると期待していると先輩のＫ子さんが「秋が来るまで待って！」と。「秋が来るまで食べないの？」と合点がいかない近藤さんでしたが合宿会場に未着のアキというニックネームの先輩がいたのだそうで「アキが来るまで」と疑問が解けてめでたくスイカを頬張ったそうです。そんな南多摩時代の笑い話を教えて下さった近藤さんにもシュロバッタにまつわる一文を寄せて頂きましたので続けてお読みください。

井上　務

母校との不思議なご縁

私は、昭和 45 年（1970 年）に南多摩高校を卒業しました。高校時代は、テニス部に所属し、真っ黒になって、白球を追う日々。試合はいつも「デルトマケ」でしたが、足腰は鍛えられました。南多摩高校の冬の体育の授業は、浅川の土手のランニング。ランニングだけは常にクラストップだったのが、私の唯一の自慢です。

福生で二人の先輩とバッタリ

短大を卒業して、特許事務所に勤めた後、結婚。夫の転勤に伴い、西宮、藤沢、広島等に移り住み、その後、夫の実家がある福生に住んで四半世紀。福生では、高齢化した雑木林を若返らせる保全活動に取り組んでいます。雑木林に生えているシュロは刈り取っていますが、その

シュロでバッタを作ることを教えて下さったのが、南高の 10 年先輩のMさん。彼女と一緒に、学童クラブでシュロ細工や切り絵を子供たちに教えています。数年前、福生市の環境フェスティバルで、バッタリ会ったのが、１年先輩の井上さんでした。

久しぶりの母校で･･･

昨秋は、シュロバッタのご縁で井上さんに声をかけていただき、思いもかけず南魂祭のあかね会のブースでシュロ細工デビューを果たしました。井上先輩は、難しいバッタを担当。私は、小学生低学年でも簡単に作れる手裏剣、熱帯魚作りを担当しました。シュロの葉っぱを触るのは初めての子供がほとんどです。最初は恐る恐る触っていますが、しばらくすると、シュロの葉っぱは紙のようには簡単に破れることはないので、シュロの扱いもだんだん大胆になってきます。

シュロ細工を指導する近藤さんと井上さん

手裏剣や熱帯魚が思ったよりも簡単に作れるので、シュロ細工に夢中で取り組み、出来上がった作品にご満悦。帰るときには、ほとんどの子供が、お友達や家の人に教えるためにシュロの葉っぱを持ち帰ります。人から人に伝える伝承遊び。伝えてゆきたい日本の文化です。

八丈太鼓

シュロ細工の合間に、体育館で行われている八丈太鼓の演奏を聴きました。八王子でどうして八丈太鼓？実は、私の長男のお嫁さんは、八丈島出身です。3 年前に息子夫婦と一緒に八丈島を旅しました。服部屋敷では、黄八丈の着物を着た女性が叩く八丈太鼓の実演を見ました。その八丈太鼓を南多摩中等教育学校（以下「南多摩」と略す）の体育館で見られるとは驚きました。昨年は、南多摩の八丈太鼓が日本一になったとのこと。早速、八丈島のお嫁さんのお母さんにその話をしました。八丈太鼓の顧問の今川先生が八丈高校に勤務していたこともよくご存じでした。国立劇場で南多摩の八丈太鼓が発表されたのも知っていました。その雄姿を見に行けなかったことをとても残念に思っていました。思いがけず、南多摩の八丈太鼓の大ファンを身近なところで大発見。

今年も南魂祭へ

シュロバッタのお陰で、人の輪が広がります。今年も南魂祭では、シュロ細工コーナーを担当したいと思っています。今度はどんな出会いがあるのか今からとても楽しみです。

近藤（旧姓：井上）富代子

歴代制服の人形

表紙の制服の写真は、南多摩中等教育学校創立 10 周年を記念して作成したもので、南多摩高校時代の制服と現在の南多摩中等教育学校の男女の制服を着た人形である。

制服の人形は、第四高女時代から作られており、一体ずつ人形ケースに収められロッカーに格納されていたが、このたびこれらの人形をまとめてガラスケースに陳列し、いつでも見られるようになった。

制服だけでなく、人形の顔も時代を反映しているようで、見ていると飽きない。一時期、制服の存在自体に反発する時期もあったが、かつては、この制服にあこがれて入学したという人も少なくないようである。

東京都立南多摩中等教育学校創立 10 周年記念式典
南多摩 110 周年・南多摩中等教育学校創立 10 周年記念祝賀会

◆南多摩中等創立10周年記念式典挙行

南多摩中等教育学校は、平成12(2000)年に、東京都から八王子地区の中高一貫教育校に指定されたことを受けその準備が進められました。平成20(2008)年4月には中高一貫6年制学校開設準備室が設置され、平成22(2010)年4月に開校にこぎつけました。

初代校長は南多摩高等学校長兼務の小林幹彦校長が着任され、1期生生徒は男子75名、女子85名の160名が入学しました。

以来10年が経過し、令和元年10月31日（木）13時30分から「オリンパスホール八王子」において、創立10周年記念式典が厳かなうちに挙行されました。

式典には、学校生徒約930名、教職員約70名ほか、来賓として東京都都議会議員、東京都教育委員会、学校運営協議会委員、歴代校長・副校長、都立学校校長及び都立中高一貫校PTA、南多摩PTA、南多摩同窓会あかね会の役員等約70名の約1,070名が出席して、盛大に記念式典が開催されました。

記念式典第１部

開式の辞、国歌斉唱のあと、永森比人美学校長の式辞がありました。式辞では、「都教委から指定された4本の指定校事業（理数リーディング校、英語教育推進校、知的探求イノベーター推進校、BYOD研究指定校）を活用し、学力の向上を図り、『心、知、体の調和』から生まれる人間力を高めるため、多様な教育活動を展開している。特に、フィールド活動では、太鼓部の生徒が『和太鼓のバチの寿命予測』で奨励賞を受賞し、東京大学への推薦合格を果たすなど、探求学習で身に着けた力により、夢の実現を果たしている卒業生が多くみられる」などの紹介がありました。

また、「使命感をもって邁進した教職員、共に歩んだ保護者、生徒に支援くださったPTA、PTA　OB会、同窓会あかね会などの方々に御礼を申し上げ、今後も『南多摩中等教育学校ここにあり！』という教育を展開して、次の10年の高みを目指して更に進化させていきたい」と強い決意表明がありました。

次に、東京都教育委員会挨拶では、秋山千枝子教育委員から、「明治41年に創立された府立第四高女から昭和25年に南多摩高等学校となり、その後100年余りの伝統を継承してきた。南多摩中等教育学校として新たな歴史を歩み始めた本校は、『心、知、体の調和』から生まれる人間力を育み、国際社会の様々な分野で活躍できるリーダーを育てることを教育目標にしている。教職員は、生徒の成長を見守りながら、『突破力のある生徒集団』への飛躍を目指し、『やりきらせる』というキーワードで生徒の夢の実現を支援している」と教職員の努力を称えました。

来賓祝辞に立たれた南多摩PTAの石井真一会長からは、「府立第四高女から南多摩高校へと受け継がれてきた伝統が、110周年を迎えるという歴史的にも尊い節目になった記念すべき時期に、保護者・PTAの一員として繋がりを持てたことに誇りを感じている。また、学校式歌の『無限の粒』を生徒が歌うときに、その詞の内容にとても感銘を受けた」ことなどを祝辞として述べられました。

次に、初代校長でありかつ南多摩同窓会あかね会の小林幹彦会長から、「平成20年4月に開設担当として赴任し、課せられた課題は開設理念である『人間力の南多摩』『心、知、体の調和』の具現化であり、その理念を読み解き具現化する教育活動はフィールドワークにある。すべての教育活動をフィールドワークに繋げることで『人間力の南多摩』を実現していく」ことを祝辞で述べられました。

そのあと、来賓の紹介、祝電披露があり、続いて南多摩同窓会あかね会から記念品の贈呈目録が読み上げられ、永森学校長に手渡されました。

同窓会から記念品贈呈

記念品目録は、①ガラスケース壱台②祭礼用附締太鼓及び締太鼓立奏台弐セット③校章入り薙刀胴七台④ファゴット壱本⑤コントラバス壱台⑥ホルン壱本です。

続いて、「美わしき八王子、逞しき南多摩」の校歌が会場全体で斉唱され、そのあと生徒により「無限の粒」の式歌が合唱され、厳かなうちに約1時間の式典は閉式となりました。

第2部の成果発表では、生徒代表の開会のことばに続き、PC同好会の編集による「Minamitama Memorial Movie」が約20分間上映されました。若い世代の視点で作成された動画は、迫力があり精度の高いムービーでした。

次いで、アメリカ留学から帰ってきた5年生の河野朱夏さんが「Self-awareness自分を見つめなおそう」との題で、英語によるスピーチを述べました。

概要は、「昨夏から今夏までアメリカの現地高校に留学したときに、現地高校生から、アジア人の外見について『なぜ目が小さいのか』『なぜ同じ顔をしているのか』を問われ困ったり、『アジア人はアメリカから出ていけ』と傷ついたりしたこともあった。帰国後に、なぜ人種差別が起こるのか研究してみたくなり、現地校に通って経験者70人にアンケートを実施した。記述回答から『人は自分と異質なものを恐れ、嫌うことで自分を守る』との回答を得て、自分の経験で、電車でアフリカ系の男性の隣の席に座れなかったことを思い出した。他者を受け入れることは難しく、無意識に他者を拒絶することが、人種差別を生み出すのだと分かった」との発表でした。

続いて、南多摩フィルハーモニーの記念演奏が、飯嶌紀子先生の指揮により力強く見事なハーモニーを奏でました。曲目は、ドヴォルザーク交響曲第3番の第3楽章の演奏でした。

次に、今年の夏、佐賀県の総合文化祭全国大会で優勝を飾った太鼓部により、「八多化の響き」の勇壮な演奏を響かせてくれました。息のピッタリ合った演奏に会場は静まり返り、終演後は拍手喝さいの渦に飲み込まれたようでした。

最後に、閉会の言葉が生徒代表からあり、感謝の言葉が述べられました。

◆記念祝賀会

記念祝賀会は、PTA、PTA OB会、同窓会が実行委員会を組織し準備をして来ました。

記念式典の後、JR八王子駅の北側にある京王プラザホテルに場所を移し、午後５時から開催され、学校関係者、学校教職員、南多摩PTA OB会、南多摩PTA、南多摩同窓会あかね会から160名ほどが参加しました。

会場入口には、歴代の制服を着た人形が並び、参加者を迎えました。記念祝賀会は、平成3年卒の伊達めぐみさんの司会で、太鼓部のOB「さて！」による和太鼓の演奏ではじまりました。祝賀会実行委員長小林会長からの挨拶に続き、永森校長先生をはじめ、来賓の方々の祝辞をいただき、懇親会に移行しました。

太鼓部の OB「さて！」による和太鼓の演奏

懇親会のアトラクションは、シンガーソングライター「SIO」こと昭和62年卒業の小塩晶人さんによるミニコンサートと司会の演歌歌手伊達めぐみさんの歌、PTA役員、学校職員、卒業生等による「無限の粒」の合唱が行われ、固かった会場の雰囲気が一気に和らぎました。その後は、食事をとりながら、参加者へのインタビューがあり、卒業生からは在校時代の思い出など懐かしい話を聞くことができました。また、普段はあまり交流がない参加された方々との交流が広がっていました。最後に、参加者全員で校歌を斉唱し、祝賀会を終了しました。

PTA・卒業生・教職員たちによる「無限の粒」合唱

記念式典・記念祝賀会の開催に当たり、多くの卒業生から寄付が寄せられたことを報告させていただきます。

生徒のデザインによる記念品（スポーツタオル）

令和元年度の同窓会活動

◆令和元年度「定期総会」を開催

令和元年となった5月19日（日）の午前11時から、あかね会定期総会が京王八王子駅前の「ザ・ビー八王子」ホテルで、50名の会員の参加のもとに開催されました。

第１部の総会は、山口久美子副会長（昭和44年卒）の進行のもと、小林幹彦会長（昭和45年卒）の挨拶のあと、議長に常任委員の小山隆司さん（昭和36年卒）が選出され、議事が進められました。

平成30年度の事業報告、決算報告及び会計監査報告が役員から説明され、それぞれが承認されました。続いて令和元年度の事業計画案、予算案について説明があり、これらもそれぞれ承認されました。

次に、役員の改選が小林会長から提案され、新たに庶務として、田村豊さん（昭和45年卒）、生田武美さん、萩原智博さん（共に昭和51年卒）、高取早苗さん（昭和55年卒）が選出され、議事が終了しました。続いて、永年あかね会活動に功績があり、この度庶務を退任された新垣富夫さん（昭和38年卒）に、感謝状と記念品が小林会長から授与されました。新垣さんには会報「美なみたま」の創刊から第10号となった今日まで、大変なご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

感謝状を手にする新垣富夫さん

第2部として、今年は母校を昭和62年に卒業されたシンガーソングライターのSIO・小塩晶人さんのミニコンサートを1時間ほど実施しました。

昭和35年卒業の土方聖子さんがSIOを紹介され、「現在は全国で年間200ステージのライブ活動のほか、多摩地域に根差した様々な活動をされ、『NHK紅白歌合戦』への出場を期待している」との熱い声援により、ミニコンサートが始まりました。

コンサートは、八王子出身のユーミンの「卒業写真」で幕を開け、「君といた夏」「いま、ありがとう」「ENDLESS」「風に乗って」「僕らの町」のオリジナル曲のほか、中島みゆきの「糸」を爽やかに歌い上げました。会場はライブコンサートに熱気ムンムンで、アンコールは、東日本大震災の被災者に向けて作った「満月」を歌ってくれました。

SIO さんのミニコンサート

興奮が冷めやらぬ中、第3部の懇親会が庶務の生田さん中村晋也さん（昭和53年卒）の進行で始まりました。冒頭、小林会長の挨拶で「本年、母校が全国10か所の拠点の一つとしてWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）に指定されたのは、これまでのフィールドワーク活動などの母校の実績があったため」と紹介されました。次いで、挨拶に立った永森比人美校長先生からは「理数リーディング校やWWLは、フィールド学習が基本になっている。SIOさんの『風に乗って』、八王子から母校をさらにレベルアップしたい」と強い決意が述べられました。挨拶の後、黒須隆一顧問（昭和35年卒）の乾杯の発声で、懇親会は賑やかにスタートしました。

昼食、懇親の場が進むと、進行役から早速、平成31年卒業の4期生4名に、大学生となっての抱負、将来の夢、南魂祭での売店出店の意気込みなどを語ってもらいました。その後、司会の進行で各テーブルから参加者の挨拶が続き、2時間の懇親会は瞬く間に時間が過ぎました。恒例の校歌斉唱は、大塚光代さん（昭和30年卒）土方聖子さん、4期生代表らの先導のもとに高らかに歌い上げて、定期総会、ミニコンサート、懇親会までのあかね会総会は、和やかなうちに無事幕を閉じました。

◆ 高尾山納涼会の開催

盛夏の終わり8月24日（土）の正午から、恒例の「高尾山納涼会」が八王子市の高尾山薬王院で会員22名の参加で開催されました。いつも出席頂いている永森校長先生、岡田副校長先生は、学校の2学期の準備のため、今回は欠席されました。

井上副会長（昭和44年卒）の司会で始まり、薬王院の教務部長・佐藤秀仁様からご挨拶を頂きました。「黒須

隆一前市長は当山の相談役であり、交流発展にご尽力頂いている。本日は素晴らしい天気に恵まれ、湿度も低く木陰は涼しい。皆様のご来山にふさわしい日となった。山では朝晩、鳴く虫の様子も変わってきている。草木、虫、杉たちが大自然の空気を吸い込んでいて、大自然の息吹を、皆様の人生に生かして頂ければ幸いです」とお話になられました。

次いで、黒須隆一顧問（昭和35年卒）が乾杯の発声を行い、精進料理を楽しみ味わう納涼会がスタートしました。高尾膳に舌鼓を打ちながら、隣の会員同士の歓談が花を咲かせます。暫くすると司会から、皆さんの近況報告をとマイクが回りました。

最初は、今回初参加の齋藤博志さん（昭和50年卒）が「年1回、総会に参加しています。ケーブル終点のビアマウントには来ていたのですが、『一度は来て修行を』の心構えで参加しました。本日頂いたハガキに『人より努力を』と自分にピッタリと感じた」と。上野千恵子さん（昭和26年卒）は「私が最高齢。薬王院にお世話になり、以前は毎日通った。来られる間は参加したい」と。大塚光代さん（昭和30年卒）は「後輩を見習い、若い人に割り込んでしまった」とジョークを飛ばしながら、近況報告をされました。野口冨巳子さん（昭和35年卒）は「美味しいものを頂き幸せです」と控えめな挨拶でした。清水美輝さん（昭和38年卒）は「遅れて到着しました。『鼓動』の仲間が八丈太鼓は素晴らしい」と。菱山剛秀さん（昭和44年卒）は「伊能忠敬は4万km歩いたというが、地球一周の長さを10年間で、それも測量しながらで大変だったと思う」と。石川和昭顧問（昭和36年卒）は「ブルーベリーを200本植えて6～8月末は休みなく収穫。今年は甘さが足りなかった、猛暑で甘くなった。これからはイチジクの収穫。梅は3年前に植え、今年は60kg収穫した」と日頃の農業体験を報告された。福島雪男さん（昭和35年卒）は「スノーマンは今年喜寿の77歳。毎月1回の横浜の飲み会を継続。免許証は返納せず、大好きなバイクで来年あたりドイツのアウトバーンを時速200kmで走りたい」と。浜中賢司副会長（昭和44年卒）は「今年の選挙で3選を果たし、議長を仰せつかった。『役目により見える景色が違う』と聞くが、全力で頑張りたい。８週前に苫小牧市ほかの姉妹都市と高尾山で精進料理を頂き薫陶を受けた」と。中田君代さん（昭和38年卒）は「今日のハガキに『素直な心で』とあり心からそう思う。庭にメジロが巣を作り、また来年3月を期待している」と。田村豊さん（昭和45年卒）は「小林会長と同期で、同じくバスケット部に所属。教員となり、高尾山日本学校、平成6～9年に八丈島に。黒須市長・石川教育長が在任時に市内の小学校長をしていた」と。黒須顧問が再び登壇し、「韓国と日本とがギクシャクして心配している。韓国にとり日本は兄のような存在、大きな星である。台湾では日本の建築物を大事にし、100年も使っているが、韓国では古い建物をすべて取り壊した。悲しいことである」などと。

その後、臼井実千恵会計（昭和46年卒）、野澤経子さん（昭和55年卒）、瀧口陽子さん（昭和57年卒）が前に立ち、プレゼントゲームを行いました。ジャンケンポンで勝ち残った6名に賞品が当たるゲームです。当たりに喜ぶ顔、悔しそうな顔、結局、当たらなかった方にも残念賞が配られました。

終わりに、堀竹充副会長（昭和48年卒）から「楽しいひと時でした。また来年を」との締めの言葉でお開きとなりました。

会の終了後、薬王院の庭で記念撮影をして、解散となりました。

納涼会参加者（高尾山薬王院の前で）

◆ 第111回「南魂祭」への参加

9月７日(土)～8日(日)の午前10時から3時まで、南多摩中等教育学校西館の2階の6年Ａ組教室をお借りして、あかね会ブースを設営し、母校文化祭「南魂祭」に参加しました。会場の従事には30名の役員、常任委員などが対応しました。

西館２階の展示コーナーには、母校の歴史をつづった7枚のパネル、生徒の制服の歴史がみられるミニチュア模型、あかね会会員・卒業生の執筆した書籍、100周年記念誌「湧水万古」などを展示し、あかね会会報やPTA会報などを配布しました。

室内にはテーブルと椅子を配置し、同窓生や訪れた一般参加者との交流の場を提供するとともに、恒例のアトラクションとして、折り紙教室、棕櫚の葉によるバッタ作製教室を開催しました。

折り紙教室は、常任委員の中田君代さん（昭和37年卒）の指導により、鉛筆立て、小物入れ、ぽち袋作りを、子ども達が無心に楽しんで折っていました。棕櫚の葉を使ったバッタ等の作製は、井上務副会長（昭和44年卒）に今年から参加された近藤富代子さん（昭和45年卒）の指導のもとに、沢山の親子が次から次へとバッタ作りに勤しんでいました。特に、小学生の子どもたちが喜んで作っている姿はとても印象的で、講師の方々も喜んでいました。

体育館では、今年、佐賀県の全国大会で優勝した太鼓部の演奏「八多化の響き」などに観客の拍手喝さいが沸きました。完成されたともいえる太鼓の響きに、会員として誇らしく感じ入りました。

また、西館2階の理科講義では、平成最後の卒業生・４期生有志が「あかね屋」を運営し、お弁当4種と清涼飲料水を販売しました。今年は東館１階ランチルームでなく、場所が2階の隅で分かりにくかったために、売上には苦戦しました。売上金額は前年の60万円を超えて70万円でしたが、1日目の弁当の売れ残りなどのため4万円余の赤字が出ましたが、場所が悪い中でよく頑張りました。なお、「あかね屋」で購入したクーラーボックス4台は、翌年以降の「南魂祭」でも使えるので、備品として残しました。

◆令和元年度「先輩に学ぶ」を開催

11月20日（水）の午後2時20分から、母校 南多摩中等教育学校の小会議室で「先輩に学ぶ」の授業が開催されました。本年の講師は、総合研究大学院大学の博士課程1年（複合科学研究科 極域科学専攻）の和田智竹さん（平成23年卒業）でした。テーマは、「極限環境（南極）で暮らす知られざる生物の生きざま」でした。

最初に、岡田副校長先生から講師のプロフィールの紹介があり、「極域におけるヒルガタワムシの多様性・生態解明の研究をされ、北極スバールバル諸島及び今年3月まで第60次南極地域観測隊の一員として南極大陸を訪れました。趣味の昆虫採集を通じ、アフリカ・南米・東南アジア各国の原住民の部落を訪ねジャングルを駆け回っています」と。

講演する和田さん

講師は、自己紹介ののち今年はルソン島、ペルー・アンデス山脈に行ってきたと興味を引く話をされる。「なぜ研究者の道を」と問われると、「虫が好き、生き物が好きだから、将来は生き物に携わる仕事をしたいと思った」と答える。大学に行き、学生時代はアザラシの生態を研究していた。赤道直下は生物多様性のホットスポットであり、日本人で二人しか採っていないモルフォ蝶を採集したという。

卒業後就職したが、あるときＴＶ放送「情熱大陸」を見て、南極で研究を行う生態学者の田邊優貴子さんに出会い、早速コンタクトを取ったという。40～50年の人生をかける場所は「南極」だと思い、総研大学院大学を受験した。大学院大学は、大学院のみの大学で、研究者の育成を行うところであると。

現在研究しているのは、南極のヒルガタワムシで、X虫とも呼ばれ、虫ではないが小さく、ほぼ無敵で、メスだけで繁殖する、クマムシと同等の能力をもつ生物である。北極から南極までどこにもいて、1㎡あたり2千万匹もいるという。南極にどのくらいの数、量がいるのか、なぜ生息できるのか、未知の基礎的な部分を解明したいと思ったと。

南極の話の前に、北極の話になる。北極とは北緯66度以上の地域をいい、2年前にスバーバル諸島を訪れた。地球温暖化で東ブッレッガー地域は、氷河が融け出ていたという。

南極の話になり、今年3月まで60次観測隊で南極に行き、美しいオーロラ、氷河、自然を見てきた。コケや生物の死骸もあり、緑の世界の湖もある。

南極には28か国、63の基地があるが、南極はどこの国の領土でもない。60年前の南極条約で、南極は皆で使おうということになっている。

日本南極地域観測隊（JARE）の60次観測隊は100人の隊員に、自衛隊員が200人の300人が行った（1次は1956年に行く。夏隊、越冬隊がある）。隊員は冬山訓練、健康診断、夏訓練を行って、2018年11月に日本を出発し、オーストラリアのフリーマントルから砕氷船しらせ（排水量3200t）に乗船し、昭和基地に向かう。100人の隊員は、気象庁5人、調理員2人、医師1人、土木職、学校職員ほか研究員である。行きの行程は3週間、帰りは2か月かかる。基地に近づくと氷河が厚くなり、しらせはラミングという氷を砕いて進む方法で基地に近づく。しらせ船内は二人1部屋で、インタネーット・DVD、運動室・散髪室があり、ソフトクリームが食べられ、カレーの日などもある。

昭和基地は船が接岸できない厳しい処であり、戦後、敗戦国として有利な基地を選ぶことができず、残された僻地に昭和基地を作ることになる。

訪ねた昭和基地は工事現場さながらで、南極大陸になく島にあった。行ったときは地表が見えた。

基地での生活は、自衛隊とほぼ同じのスケジュールで朝6時に起床、6時半頃に朝食、8時に活動開始、11時半

に昼食などである。

南極での調査は、1週間ごとにヘリコプターで移動し、ラングホブチ、スカーレン、インホブデなど5か所程度を調査する。海中の調査もカメラで行ったが、水中に魚はいなくて、藻の世界であった。4年前に訪れた隊員の眼鏡ケースがピカピカで見つかった。

「南極はどんな処」には、極寒、強風、強乾燥、強紫外線、太陽エネルギーの制限（白夜、極夜）、時の流れが遅い。氷はあっても水が少ない、日焼けする、氷河期に近い環境があるなどと。

ヒルガタワムシなどもそうだが、南極は生物種が少なく、生態系の構造を捉えやすいなどが特徴だと。

最後に生徒に贈る言葉として、観測隊は一つの家族、チームであり、協力がないと何もできない。人とのつながりが大事で、研究者はつながっていると。生き方としては、「やりたいことをやる」、「外国人のように他人の目を気にしない」、そして「情熱的に生きる」ことが大事だと話された。

これから私は、チェコの研究に3か月ほど訪れると、今後の活動を話し、講演を締めくくった。

講演後に、4人の生徒から質問等があり、講師がこれに快く答えて、1時間の講演は終了しました。

学校から頂いた生徒の感想文には、①自分のやりたいことに取組む勇気、仲間とのメンバーシップの大切さを知った、②自分のやりたいことに進路を決めるのが良い③興味あることを将来につなげられたら良い、④他人の目を気にせず自分のやりたいことをしたい、⑤色々な国の様々な光景や生物を見てみたい、⑥北極や南極がより身近なものとなった、などの生徒の思いがつづられていました。

講演を終えて

◆ 令和初の「新年会」開催

令和最初の新年会が、令和2年1月25日（土）、京王八王子駅前のザ・ビー八王子において、40名が出席して開催されました。前年3月卒業し、南魂祭で「あかね屋」を運営した中等教育学校4期生の会員3名を含め、平成の卒業生が6名参加しました。

新年会懇親会の前に行われた常任委員会では、まず10月31日の「南多摩110周年・南多摩中等教育学校創立10周年記念祝賀会」開催状況や「先輩に学ぶ」授業の実施などが報告されました。また、①令和2年度会報「美なみたま」が4月に1万7千部発行、②令和2年度定期総会が5月17日（日）にザ・ビー八王子で開催　などの協議が了承されました。

新年会は、生田武美・庶務（昭和51年卒）の進行で開かれ、まず小林幹彦会長（昭和45年卒）が挨拶しました。「110周年の記念祝賀会は、PTAとPTA OB会の皆様と協力して、良い会がもてたと思う。同窓生が母校を支援することは良いことであり、この度南多摩フィルの生徒からお礼の便りがあった。楽器を寄贈いただき、定期演奏会に向けて頑張っている。より良い演奏で人を感動させる演奏をしたい」とのお礼状が紹介されました。

歓談中

次いで、永森比人美校長から挨拶があり、「110周年記念式典のご支援に感謝している。本校には、全国から探求学習などを目当てに見学者が来ている。生徒は、勉強だけではなく南フィル、なぎなた、太鼓、陸上など部活動でも頑張っている。『校舎は古く地味だが、本物だね』と言われるようにしたい」と抱負を語ってくださいました。続いて、PTA石井真一会長が挨拶され、「記念祝賀会は南多摩らしい会となった。あかね会の皆様から『無限の粒が良かった』との評判をPTA会員に伝えた」と話されました。さらに、PTA OB会の佐藤健司幹事長からは「太鼓部の太鼓の張替えなど、同窓会の支援に感謝している」とご挨拶がありました。

いよいよ乾杯の発声となり、石川和昭顧問（昭和36年卒）から「平成から令和に変わった新年に、皆さんで頑張りましょう」と祝杯が上がりました。

その後、食事・歓談となり、暫くして進行役の生田庶務がテーブルごとに、半数以上の方々から新春の抱負、近況などのインタビューが行われました。

若手の篠航希さん（平成31年卒）は日本大学経済学部で、地理経済学を学んでいるとのことでした。同期の新井乃理花さんは東京農工大学で機械工学を学び、在学中

に南フィルに所属し、現在一橋大学管弦楽団で活躍されているそうです。

中村晋也さん（昭和53年卒）はパソコン関係の仕事をし、現場から離れて仕事をしたいと介護タクシーの事業に関わっているとのことでした。鴻巣市在住で、一番遠くから来られた杉田誠治さん（昭和51年卒）は、在学中サッカー部・柔道部に属し今は木遣りを唄うと紹介し、木遣りを一節唄っていただきました。福島雪男さん（昭和35年卒）は喜寿を迎え、昨年5月から毎月1日に高尾山に登山をしているとご披露されました。今年はドイツのアウトバーンを車で走りたいと抱負が述べられました。

五十嵐満里子さん（昭和34年卒）は高校入学時に泳げなかったのですが、先生からバタ足が上手と誉められ水泳部に入り、そのお陰で人生を楽しく過ごしていますと話されました。

広瀬智子さん（昭和27年卒）は87歳で、八王子空襲の語り部をしている。第四高女の最後の入学生で6年間通い、卒業時は南多摩高校であったと思い出を語られました。新垣富夫さん（昭和38年卒）は昨年ケガをされ調子を崩した。今年は病気なしで頑張りたいと話されました。また、菱山剛秀さん（昭和44年卒）からは、会報の原稿をそれぞれよろしくお願いしたいと話がありました。

このほか、多くの方のインタビューが行われました。

参加者のインタビュー

予定された時間が過ぎ、年配の常任委員に「多摩の郷に・・」の第四高女校歌、中等4期生らに「湧水は・・」の南多摩高校・中等教育学校の校歌の先導役をお願いし、全員で声高らかに斉唱しました。

結びに、堀竹充副会長（昭和48年卒）の閉会の辞で、和やかに経過した新年会を閉じました。

◆ 令和元年度の同窓会活動紹介

令和元年度の同窓の会活動は、5月の総会の後、役員会、常任委員会を中心に協議して活動を進めています。元年度の開催状況は次表のとおりです。

常任委員会等開催状況

回	議　題　等
110周年第3回 実行委員会 4月13日	○記念祝賀会の実施計画 ○案内状の発送、会費の徴収 ○記念募金の計画
役員会 5月11日	○定期総会の開催・準備 ○母校への支援計画
定期総会 5月19日	**●定期総会（決算、予算、役員改選等）** **●ミニコンサート、SIO（昭和62年卒）** **●懇親会**
第1回 常任委員会 6月22日	○総会・懇親会の反省 ○記念祝賀会の実施計画 ○高尾山納涼会・南魂祭参加の計画
第2回 常任委員会 8月24日	**●高尾山納涼会** ○南魂祭参加、「先輩に学ぶ」の計画 ○記念祝賀会の実施計画
110周年第4回 実行委員会 9月7日	**●「南魂祭」への参加（9/7～8）** ○記念祝賀会の計画・参加状況 ○110周年記念募金の報告
役員会 10月19日	○記念祝賀会の計画・参加状況 ○新年会・会報発行の計画 ○母校の支援計画
記念祝賀会 10月31日	**●創立10周年記念式典（役員参加）** **●110周年記念祝賀会（160名参加）** ・祝辞・乾杯懇談・アトラクション
第3回 常任委員会 1月25日	**●新年会** ○同窓会会報の発行・広告依頼 ○令和2年度定期総会の計画準備
役員会 2月29日	○会報編集の進捗状況 ○母校の支援計画
第4回 常任委員会 3月28日	○令和元年度の事業実施状況 ○会報編集の進捗状況 ○総会の計画・準備

◆会員名簿を発行しました

南多摩同窓会あかね会は、会員相互の親睦・研修と母校の支援活動の充実に努めています。2018年2月初旬に同窓生のつながりを確かなものとするため、会員名簿を10年ぶりに発行しました。発行は、実績と信頼のある業者に調査・作成を依頼し、約1500名の会員にご購入いただきました。卒業年次ごとの同期会やクラス会開催の折にご活用いただければ幸いです。

なお、会員名簿はまだ若干の残部がございます。

会員の方でご購入を希望される方は、以下にご連絡ください。

⇒連絡先：溝口　猛　【電話】090-6489-5939
　価　格：4,600円（送料込）

※　会員名簿は、会員以外への販売は行っていません。

南多摩110周年・南多摩中等教育学校創立10周年 記念募金協力者 芳名録（令和元年12月現在）

昨年4月に発行しました「同窓会会報『美なみたま』第10号」において、「南多摩110周年・南多摩中等教育学校創立10周年 記念募金」のご協賛をお願いしましたところ、令和元年12月31日現在で南多摩PTA協賛金として100万円、南多摩PTA OB会協賛金として20万円を戴くほか、記念募金が225件、約334万円の協力金を頂戴いたしました。このほか、広告掲載協賛として、28万円の協賛をいただきました（合計482万円）。ご協力戴きました皆様方に、感謝申し上げますとともに、謹んでご報告申し上げます。（敬称は省略）

なお、この「記念募金協力者 芳名録」は、同窓会のホームページに掲載させていただきます。

南多摩同窓会 あかね会

会 長 小林　幹彦

卒年	芳名
旧職員	榎本成己
	畑山喜美夫
	吉田寿美
16	鈴木綾子
	長春子
	藤田元子
	田中スエ
	坂田美枝
18	山室幹子
19	須崎文代
	末岡愛子
	渡邊マサ子
20	彦根和代
	福山晴江
21	井上貴代子
	松井嵯峨
	住友ミヨ子
23	内田豊子
	大野玲子
	山田京子
	大竹澄子
24	関田篤子
25	加藤香代子
	大島富子
26	斉藤伸枝
	矢部昭枝
26	上野千惠子
27	秋山泰子
	三隅洋子
	廣瀬智子
	藤村晴子
	古畑セイ子
	高田順子
	米澤浩子
	渡辺正子
	石田菊江
	村松為子
28	栗原信治
	横田睦
	嘉藤久子
	岩村弘
	大山隆玄
	森悦子
	加藤八重子
29	大久保キヨ子
	吉田久子
29	志村嘉一
	大石節子
	安藤登喜子
30	大塚光代
	稲葉治子
	小室とも子
	長田一夫
	磯矢正枝
	臼井克年
	清水歌子
31	小川禎子
	常盤正臣
	坂陽子
	川村靜代
	内之牧博子
32	内藤小枝子
	赤平啓
33	篠原脩
	竹内公子
	松澤星子
	春本生子
34	石塚知子
	岩田恵美子
	辻野宗之
	中浜和子
	村山順子
	一水みちえ
	五十嵐満里子
	千葉千栄子
	中沢和子
	新田ミツ子
	市原久美子
	齋藤千代子
	浅野常子
	増田敦子
	原田記代子
	加藤孝子
35	田中ミホ
	有元則夫
	五十嵐美佐子
	黒須隆一
	野口冨巳子
	田中由美子
	秋元晴子
36	毛利スミ
	クローゼ宏子
36	石川和昭
	小山美恵子
	駒井直子
	大類敏子
37	小林かなへ
	石川志津子
	石井召子
	大貫恵子
	三島徹
	松﨑充雄
	山崎トシ子
	神山務
	石井利子
	中田君代
	小山俊子
	横瀬峯子
38	古森知子
	野中克代
	笹野正章
	花井純恵
	新垣富夫
	福田珠子
	鹿野正夫
	森保彦
	中島尚二
	加藤晃
	三浦美智子
39	山﨑喜久子
40	青木一郎
	榎本和夫
41	中村保夫
	佐藤知彦
	中込満
42	高水芳枝
	加園茂子
	林和夫
	河合豊
	小林小夜子
43	平野典子
	天野ひろ子
	桑原純二
44	河内典子
	山口久美子
	杉江喜美子
	井上務
	小関裕子
44	村野芳男
	溝口猛
	佐藤フミ子
	菱山剛秀
	齊藤万理子
	高尾久美子
45	平澤康子
	工藤幸一
	小林幹彦
	田村豊
46	臼井実千惠
	伊藤三男
	野口勝
47	神田緑
	吉澤弘明
	沓名美子
	松浦安男
	杉山喜久江
	瀬川京子
48	鳥海正男
49	岩城真佐子
	富川多津子
	佐藤千代子
50	上村昌彰
	齋藤博志
51	生田武美
	乙幡博之
	川﨑恵美子
52	松川恵美子
	山口慶介
53	岩崎真由美
	中村晋也
55	笹本清明
	野澤経子
	髙取早苗
57	石政明美
	瀧口陽子
60	立川美幸
	藤井英太郎
63	井上光宏
H1	佐伯知子
H2	西澤篤司
H3	常盤文子
H7	小泉慶
H8	久野木史恵
H13	小林正生
H14	芳賀秀郷
H17	坂本俊章
H22	宮野綾香
H24	高木登志夫
H26	立川晶子
H28	柿沼那宇
	舟橋輝昴
H29	浅見孔
H30	松本厚
H30	日笠美音
H31	佐々木蓮花

在校生保護者

学年	芳名
6A	荒井理乃
5D	島田英明
5B	田村正巳
5A	加藤良浩
	濵口早苗
4B	織田聡
4D	
2C	外山英司
4D	
2A	真島一郎
3D	赤木勇一
	阿部眞裕子
3C	滝澤栄
3B	三和美樹
3B	村野知美
3A	笹岡芽以子
2D	大高一也
2D	宮田見次
2D	下田浩平
2B	田邊政昭
	花谷篤
2A	佐藤実
1C	齋藤厚
	宇佐道子
1B	大村三郎
1B	田中正美
1A	菊川　知行
	中屋　　健

【広告】

卒年	芳名
31	常盤書籍紹介
35	㈲三共社
35	東京工科大学
H3	ホテルベル鐘山
25	大島耳鼻咽喉科
27	石田産業㈲
28	高尾山薬王院
28	浅川保育園
29	糠信歯科医院
31	㈲保寿産業
32	伊藤税務会計事務所
33	勝田医院
34	斉藤都世子作品ルーム
34	㈱増田禎司商店
35	八王子・台湾友好交流協会
35	多賀保育園
38	西東京会計
44	グループホームびおら
44	㈱浜中企画
46	なかの幼稚園
53	㈲ライズ
55	ステート・ストリート
H5	空衣事務所
H20	黒須建設㈱

記念募金金額別

（単位：千円）

300	1名
200	1名
150	1名
100	6名
50	8名
30	3名
25	2名
20	25名
10	44名
5	116名
3	5名
2	8名
1	4名

創価大（壁面）

港区立芝浦小（床と階段）

ミャンマーチーク販売　株式会社
〒160-0023　新宿区西新宿3-8-4　BABAビル1F
http：//www.myanmar.co.jp　☎03-5333-3055
代表取締役　臼井成美　取締役　臼井実千恵（旧姓 岡村／昭和46年卒）

学校法人 片柳学園
理事 黒須隆一【昭和35年卒】

東京工科大学
日本工学院専門学校　日本工学院八王子専門学校
日本工学院北海道専門学校　東京工科大学附属日本語学校
www.katayanagi.ac.jp

不動産業（賃貸マンション・貸倉庫）
石田倉庫のアートな2日間

石田産業有限会社

代表取締役社長　石田 高章
常務取締役　石田 菊江（昭和27年卒）

〒190-0013 東京都立川市富士見町 2-32-27 石田産業ビル 2F
TEL：042-522-2406　FAX；：042-525-0483

有限会社 保寿産業

代表取締役　小川 禎子
（旧姓 岸　昭和31年卒）

〒190-0023 立川市柴崎町1-9-32

法あるところに救済あり！

司法書士・行政書士 空衣（そらい）事務所

相続登記はお早めに！
代表 入沢 修自（平成5年卒）
〒206-0011 東京都多摩市関戸4－23－1 関戸ビル301
電話：042-389-5570 Fax：042-389-0755
http://www.sorai-law.com

TKC. KFS 推進事務所

税理士法人 西東京会計

代表社員　加藤 晃（昭和38年卒）

〒192-0032 東京都八王子市石川町 733-4
TEL：042-644-1771　FAX：042-645-7372
http：//www.tkcnf.com/ntk/

病院、施設の給食品専門問屋

増田屋
株式会社 増田禎司商店

代表取締役 増田太郎／増田敦子（旧姓 土屋）（昭和34年卒）

〒193-0801 八王子市川口町 1415
TEL：042-654-2222　FAX：042-654-5049
http://www.masudaya.1965.com

一級建築士事務所

株式会社 浜中企画

浜中 賢司（昭和44年卒）

〒193-0801 八王子市川口町 3411
電話：042(654)4325　FAX:042(654)6128
mail：hamanaka@tokyo.email.ne.jp

NPO法人
八王子・台湾友好交流協会

理事長　黒須隆一
（昭和35年卒）

〒192-0046 八王子市明神町4-1-2ストーク八王子205号
TEL・FAX 042-644-5580
携帯 090-6150-4965

心のふるさと
祈りのお山
高尾山

薬王院 山主　大山 隆玄（昭和28年卒）
http://www.takaosan.or.jp

グループホーム
びおら

要介護の高齢者に共同生活介護を提供するほか、デイサービスやサロンのサービスを提供しています。

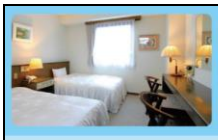
齊藤　万理子（昭和44年卒）
〒192-0056八王子市追分町9-4
TEL.042-682-1301
FAX.042-682-1305
http://www.biora.biz

コンピュータソフト開発＆運用

（有）ライズ

代表取締役　中村 晋也（昭和53年卒）

〒192-0066 八王子市本町30-6（N-Twoビル3F）
電話：042-620-5425　FAX：042-689-4149



@ホーム宿　南多摩高校　平成３年卒業
ホテルベル鐘山
富士山リゾート＆ビジネス

【アットホーム宿　ホテルベル鐘山の３つのホッと♪】
1. スタッフの笑顔と温かいおもてなしにホッと♪
2. 美味しいご飯にホッと♪
3. バナジウム天然水で湯浴み☆お部屋でホッと♪
歌手 伊達めぐみ
Tel 0555-24-8888 山梨県富士吉田市上吉田東 9-8-10
(有)オフィスめぐみ・伊達めぐみ後援会事務局　八王子市中野上町 5-14-1 TEL 042-622-9932

Sankyosha 刷新ing
お任せ下さい！印刷のすべて。
取締役副社長　野口　冨巳子（昭和35年卒）
有限会社 三共社
〒192-0041 東京都八王子市中野上町 2-29-1
TEL.(042) 625-8325　FAX.(042) 625-8369
http://www.san-p.co.jp

高級オリジナルニット
色彩の魔術師
齋藤都世子作品ルーム
浅野　常子（昭和34年卒）
〒192-0904 八王子市子安町3-32-10-106
https://www.saitoknit.com
☎・FAX：042(646)9833／090-1422-1192

伊藤税務会計事務所
税理士 伊藤　正啓（まさひろ）
伊藤　幸子（昭和32年卒）
〒192-0045 八王子市大和田町３－６－21
TEL：(042)642-2719　FAX：(042)642-5034

医療法人社団　大島会
大島耳鼻咽喉科クリニック
院長 大島 清史／副院長　澁谷　正人
大島 富子（昭和25年卒）
〒192-0046 八王子市明神町 4－5－9
TEL：042-642-8012
http://www.oshima-ent.com

ISO 9001 認証取得
エコアクション21認証取得
黒須建設株式会社
代表取締役社長　黒 須 光 隆
取締役　黒 須 俊 輔（平成20年卒）
本社　〒192-0063 東京都八王子市元横山町1-29-12
TEL 042-642-5331(代)　FAX 042-642-5314
http://www.kurosu-kensetsu.co.jp

NAKANO
学校法人 八王子中村学園
なかの幼稚園
なかの幼稚園　そこは
子どもの世界です。
〒192-0041 八王子市中野上町 5-32-13
TEL:042-622-3001・FAX:042-624-3103
http://www.nakano-kd.ed.jp/
理事長 中村　健(昭和 46 年卒)

明るい未来を拓く、元気な子供達を育てます。
社会福祉法人　相友会
浅川 長房 西諏訪
保育園
諏訪 のぞみ乳児園
理事長　村松 一恵（昭和 28 年卒）
法人本部〒193-0812 八王子市諏訪町５ TEL：042-651-4555

「学校支援協力金」のお願い

会報「みなみたま」第11号の発行は、卒業生会員（約3万名）のうち物故者、消息不明の方を除いた1万6千名の方にお送りしました。

「学校支援協力金」は、同窓会として在校生の学習、部活動、進路指導などを積極的に支援するとともに、同窓会の活動を継続することを目的に、卒業生の皆様にご協力をお願いするものです。

学校への支援では、昨年度の南多摩中等教育学校創立10周年を記念して、部活動に必要な用具や、記念誌、記念品作成への支援、卒業生への卒業証書ホルダーの提供等を行っています。

学校が中等教育学校になり、在校期間が6年間になったことにともない、卒業生が1/2に減少したため、卒業時に納入いただいている同窓会の運営費も減少しております。

1口千円（なるべく2口以上をお願いしています）とし、母校支援などの同窓会活動の資金に充てさせていただきます。

ご協力は任意ですので、お志のある方は可能な範囲でご協力をよろしくお願いします。

「令和2年度あかね会定期総会」について

南多摩同窓会あかね会は、毎年、5月の第3日曜日に八王子市内で定期総会を開催しています。（「南多摩同窓会あかね会」規約第7条）

本年度は、新型コロナウィルス感染症の感染拡大の影響を考慮し、毎年、定期総会に続き、講演会、懇親会は中止します。

また、会場の確保が直前まで不透明なため、会場が決定した時点でお知らせしますので、ご出席いただける方は、下記により事前にご連絡をお願いします。

出席者の安全確保のため、会員の皆様にはお手数をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。

令和元年の定期総会審議の様子

令和２年度定期総会

【日時】2020年5月17日（日） 11:00～12:00

【場所】「スカイラウンジ・クレア」（予定）
八王子市旭町 9-1（東急スクエア 11 階）
☏　042-643-2333

【議事】
事業報告・決算、事業計画・予算、その他

【講演会・懇親会】
本年度は実施しません。

【連絡先】
下記へ5月7日（木）までにご連絡ください。
【メール】mail@akanekai.org
【電　話】　山口久美子　☎090-1214-7484
溝口　　猛　☎090-6489-5939

同窓会の活動に一緒に参加してみませんか

新型コロナウィルス感染症の影響で、行事を中止・延期する可能性があります。
行事の変更についてはホームページに掲載しますので、参加を希望される方は、事前にご確認ください。

◆高尾山納涼会（8/22（土））
暑い夏に高尾山薬王院の客殿で精進料理を食べて、“夏ばて”を解消しませんか。　参加費5,000円（予定）

◆母校文化祭「南魂祭」（9/5（土）・6（日））
卒業して離れていた母校を訪れてみませんか。
南多摩同窓会「あかね会」のブースで卒業生の皆様をお待ちしています。

◆新年会（令和3年1/23（土））
1年の初めに、年代を超えた卒業生との交流ができます。同級生同士の参加も歓迎しますので、お気軽にご参加ください。　参加費6千円（予定）

⇒連絡先　　溝口　猛　☎090-6489-5939

住所変更の際には、同窓会にご一報ください

毎年、会報紙を発行すると、多数の戻り便が発生しています。会員の皆様にご住所やお名前の変更がありましたら、同窓会の名簿担当にご連絡ください。

【メール】meibo@akanekai.org
【郵　便】〒192-8562　八王子市明神町 4-20-1
都立南多摩中等教育学校内　あかね会名簿担当あて

【編集後記】

「南多摩」が中等教育学校になって10年が過ぎた。

前身の南多摩高校、第四高女を含めると110年を超える。第四高女の最初の卒業生が創設した同窓会は、学校が変わっても継続し続けてきた。中等教育学校の6年間は、子供から大人になるというその人の一生を左右する重要な時期である。第四高女の最後の卒業生は、戦争という体験をした。中等教育学校の最初の卒業生は、この学校で東日本大震災を経験した。この時期の様々な体験が、その人の人生にとってかけがえのないものになる。

同窓会は、人間形成の大事な時期を過ごした母校と卒業生を繋ぐ絆として設立され、同窓会はこれまでも母校の発展を願い、現在も在校生の学校生活が充実したものなることを願って学校への支援を続けている。この会報が同窓会の理解につながることを願っている。（菱山）